

創造から新天新地へ—24章でたどる神の救済史

11章 「終末の王国」

ダニエル書7章

1. はじめに

(1) これまでの流れ

- ①創造（創1章）
- ②墮落（創3章）
- ③アブラハム 契約（創12章）
- ④出エジプト（出12章）
- ⑤荒野での律法付与（出20章）
- ⑥約束の地の征服（ヨシ1章）
- ⑦ダビデ契約（2サム7章）
- ⑧王国の崩壊（2列25章）
- ⑨受難のしもべの預言（イザ53章）

(2) 前回はエレミヤ書31章を取り上げた。

- ①南王国ユダの最末期
- ②契約違反による裁きとしてのバビロン捕囚
- ③希望が見えない歴史のどん底
- ④「新しい契約」の宣言

(3) 今回は、ダニエル書7章を取り上げる。

- ①歴史書ではなく預言的転換点
- ②地上の歴史を天の視点から見る章

神は歴史を支配しておられる。

4つのキーワードを学ぶとそれが分かる。

I. 四つの獣—人間の王国の本質（1～8節）

Dan 7:1 バビロンの王ベルシャツアルの元年に、ダニエルは寝床で、ある夢と、頭に浮かぶ幻を見た。それからその夢を書き記し、事の次第を述べた。

Dan 7:2 ダニエルは言った。「私が夜、幻を見ていると、なんと、天の四方の風が大海をかき立てていた。

Dan 7:3 すると、四頭の大きな獣が海から上がって来た。その四頭はそれぞれ異なっていた。

1. 異邦の支配が「獸」として描かれる理由

(1) 神のかたちから逸脱した権力

①人間は本来、神のかたちとして理性的・道徳的支配を委ねられていた。

②しかし神を離れた支配は、神の性質を反映しなくなった。

(2) 力・暴力・自己神格化

①獸は本能で生きる。

②同様に、神を認めない王国は、力・恐怖・自己正当化によって支配する。

2. 四つの獸の象徴

(1) 獅子（バビロン）

①威厳と力を誇る帝国

②ネブカドネツアルの栄華と傲慢を象徴している。

(2) 熊（メド・ペルシア）

①片側に偏った支配（ペルシアの主導権）

②力による拡張と征服の帝国

(3) 豹（ギリシア）

①迅速さと知略

②アレクサンドロス大王の急速な征服を思わせる。

(4) 恐ろしい第四の獸（最終的異邦帝国）

①小さな角の出現

②神に敵対することばと行動

③終末的反キリスト像への接続

II. 年を経た方一天の法廷と主権者なる神（9～12節）

Dan 7:9 私が見ていると、／やがていくつかの御座が備えられ、／『年を経た方』が座に着かれた。／その衣は雪のように白く、／頭髪は混じりけのない羊の毛のよう。／御座は火の炎、／その車輪は燃える火で、

Dan 7:10 火の流れがこの方の前から出ていた。／幾千もの者がこの方に仕え、／幾万もの者がその前に立っていた。／さばきが始まり、／いくつかの文書が開かれた。

Dan 7:11 そのとき、あの角が大言壯語する声がしたので、私は見続けた。すると、その獸は殺され、からだは滅ぼされて、燃える火に投げ込まれた。

Dan 7:12 残りの獸は主權を奪われたが、定まった時期と季節まで、そのいのちは延ばされた。

1. 地上の混乱に対する天上の静けさ

- (1) 地では獸が暴れていますが、天では慌ただしさはない。
①神の支配は動じない。

2. 「年を経た方」の描写

- (1) 永遠性・聖さ・裁きの権威

- ①白い衣、燃える火、無数の従者
②神は時間にも歴史にも制約されない方である。

- (2) 重要な神学的ポイント

- ①裁きは感情的反応ではなく、正義に基づく判断である。

- (3) 歴史の最終判断は人間にはない。

- ①どの帝国も、自らを永遠とはできない。

- (4) 神はすでに法廷を開いておられる。

- ①終末は突然始まるのではなく、すでに神の計画の中で進行中である。

III. 人の子—眞の王国の到来（13～14節）

Dan 7:13 私がまた、夜の幻を見ていると、／見よ、人の子のような方が／天の雲とともに来られた。／その方は『年を経た方』のもとに進み、／その前に導かれた。

Dan 7:14 この方に、主權と栄誉と国が与えられ、／諸民族、諸国民、諸言語の者たちはみな、／この方に仕えることになった。／その主權は永遠の主權で、／過ぎ去ることがなく、／その国は滅びることがない。

1. 「人の子」の意味

- (1) 単なる人間ではない。

- ①雲に乗って来られる存在である。

- (2) 神から権威を委ねられた存在

- ①主權は奪うものではなく、与えられるものである。

- (3) 支配の特徴

- ①永遠の国
②滅びない支配

③全民族的王権

2. メシア預言としての重要性

(1) 後の福音書理解への橋渡し

①後にイエスがご自身を指して用いられる「人の子」という称号の背景。

IV. 聖徒たち－王国を受け継ぐ者（16～18節）

Dan 7:16 私は、傍らに立っていた者たちの一人に近づき、このことすべてについて、彼に願って確かめようとした。すると彼は私に答えて、そのことの意味を告げてくれた。

Dan 7:17 『これら四頭の大きな獸は、地から起る四人の王である。

Dan 7:18 しかし、いと高き方の聖徒たちが国を受け継ぎ、その國を永遠に、世々限りなく保つ。』

1. 驚くべき逆転

(1) 歴史の主役は獸では終わらない。

2. 獣の支配→聖徒の支配

(1) 神の國は委ねられる國である。

(2) 聖徒とは誰か

- ①イスラエルの残れる者
- ②メシアに属する者たち

3. 王国神学の核心

(1) ダニ 7章と黙示録の連続性

(2) 地上の王国の終焉と神の王国の完成

(3) 新天新地への流れ

(4) 一時的支配→永遠の支配

(5) 混乱→義と平和

結論：今日の信者への適用

1. 自分は「どの王国に属して生きているのか」を自覚する。

(1) 世界には二つの支配原理が並行して存在している。

- (2) 地上の王国：力・恐怖・自己正当化によって支配する「獣の王国」
 - (3) 天から与えられる王国：神の主権と正義に基づく「人の子の王国」
 - (4) 自分はどの王国で生きているか。これが信仰生活の出発点である。
2. 目に見える権力や時代の動きに過度に振り回されない。
- (1) ダニエル書7章では、地上では獣が暴れている。
 - (2) しかし天では、すでに法廷が開かれ、裁きが進行している。
 - (3) 神の主権は一度も揺らいでいない。
3. 力によらず、忠実さによって生きる。
- (1) 王国を受け継ぐのは、「いと高き方の聖徒たち」である。
 - (2) 彼らの特徴は、神に属し続けたことである。
 - (3) 社会の中で少数派であっても、神の王国は彼らに委ねられる。
4. 新天新地を見据えて、希望をもって忍耐する。
- (1) ダニ7章は、新天新地への直接的描写ではない。
 - (2) しかし、そこへ至る決定的な転換点を示している。
 - (3) 神の国というゴールを知っているからこそ、希望をもって今を生きる。